

帝キキ芦屋現代映畫

原作脚色並監督者

大森 勝氏

撮影者

二宮 義曉氏

主演者

歌川 八重子嬢

紹介

第二百六十六號

三面記事にありけうな物語をまごめたものであるが帝キキ現代劇として管弱ながら見られるもの一つ云へよう。大森勝氏の脚色並監督は歌川八重子嬢のお千代が又好い演事が出て来た。歌川八重子嬢のお千代が又好い演技を見せて呉れた。夫と弟の犠牲となつて死を決する迄の氣持をこれだけ出し得るのはやはり年功である。花田章氏の彌一は一寸演り難い役ではあるが全然歌川八重子嬢に食はれて居る。藤間林太郎氏の伊太郎は餘り活躍しない。役ながら役の柄はびつたり出来て居た。撮影その他は先づ普通。

——山本 綠 葉——

興行價值——家庭悲劇であるから婦人客に相當受ける内容を持つて居る。添物以上にはならないが、添物として上の部である。(十月十三日、京都 キキマ倶楽部封切)